

雑豆を巡る 最近25年の主な動きについて

(公財)日本豆類協会

昭和54年から(財)雑豆輸入基金協会が発行してきた「雑豆時報」については、ガットウルゲイラウンド(UR)農業合意に基づき、雑豆の輸入割当制度(IQ)が関税割当制度(TQ)に変更になった時期(平成7年4月)に合わせて、その内容を充実させた上で、(財)日本豆類基金協会(現在の「(公財)日本豆類協会」)が「豆類時報」として発行することになりました。

さて、今回の節目に当たりまして、ここでは第1号発行からの25年間における雑豆を巡る主な動きについて概観したいと思います。

1. 雑豆を巡る最近の主な動き

冒頭にも述べました通り、平成7年度に雑豆の輸入割当制度(IQ)が関税割当制度(TQ)に変更になった後も、農業に関する貿易問題についてはWTOの場で引き続き議論が続けられてまいりました。

一方、環太平洋諸国間でTPP11が定められましたが、小豆等雑豆は、引き続き関税割当制度により、国内生産で不足する量を輸入することで合意されました。

年	月	雑豆を巡る最近25年の主な動き
平成7年	4月	雑豆の輸入制度が輸入割当制度(IQ)から関税割当制度(TQ)に変更
	8月	(財)雑豆輸入基金協会解散
平成12年		平成12年産小豆大豊作(道単収:253kg)
平成16年	7月	WTO交渉で枠組み合意(16年12月を交渉期限)
平成16年 ～平成20年		小豆5年連続の豊作(道単収:244kg~262kg) 加糖餡輸入が最高を記録(平成19年暦年93,239t)
平成25年	3月	政府、TPP交渉に参加方針決定
	4月	法人名を「公益財団法人日本豆類協会」に改称
平成27年	7月	TPP大筋合意
平成28年		天候不順と台風等の被害による小豆の不作(道単収:138kg)
平成30年	12月	TPP11発効(雑豆の一次関税:10%→0%)
令和元年		平成30年産不作による令和元年(豆年度)小豆価格の高騰(40,507円/60kg)
	2月	日EU・EPA発効(雑豆の一次関税:10%→0%)
令和2年	1月	日米貿易協定発効(雑豆の一次関税:10%→0%)

2. 北海道の小豆といんげんの生産状況の推移

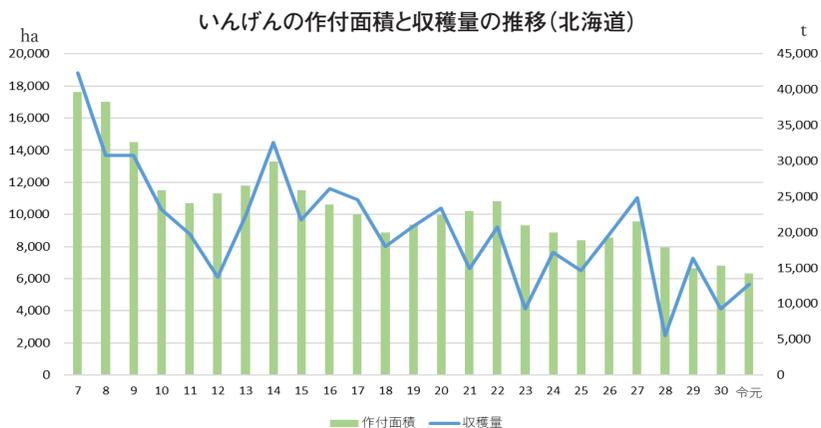
最近25年間における雑豆の生産の動きについて、主産地である北海道の状況をご紹介します。

(1) 作付け面積と収穫量

小豆といんげんの作付け面積の推移を見てみますと、グラフからも明らかなように継続的に減少傾向を示しています。特に、いんげんに関しては、平成7年から平成11年にかけて急激に作付け面積が減少したことが分かります。

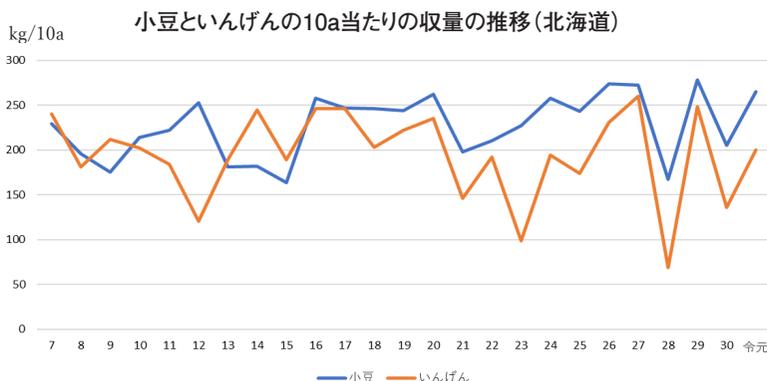
この作付け面積の減少傾向は、基本的には収穫量の推移に反映されていますが、10a当たり収量が年により相当上下するため、収穫量も年による変動が大きくなる傾向があります。

なお、ここ数年の収穫量の推移に関する特徴的な動きとしては、平成28年の落ち込みが目立っています。これは、天候不順と台風等の被害による不作の影響が大きかったと考えられます。



(2) 10a当たり収穫量

一方、10a当たり収量の推移は、気象条件により年ごとに変動していますが、小豆に関しては、耐冷性、病害抵抗性に優れた品種の普及により、近年気象災害の年を除き200kgを上回る水準を維持しています。



3. 小豆といんげんの新品種の育成状況

北海道の小豆に関しては、昭和56年に冷害に強く、良質・安定多収品種の「エリモショウズ」が育成され、長年にわたり北海道の基幹品種として栽培され続けてきました。その後、「落葉病」「莖疫病」「萎凋病」等の病害抵抗性品種の育種や無霜期間の短い地域への対応のために早生品種の育種が行われてきました。また、最近では加工適性や機械収穫適性などの育種目標も取り上げられています。

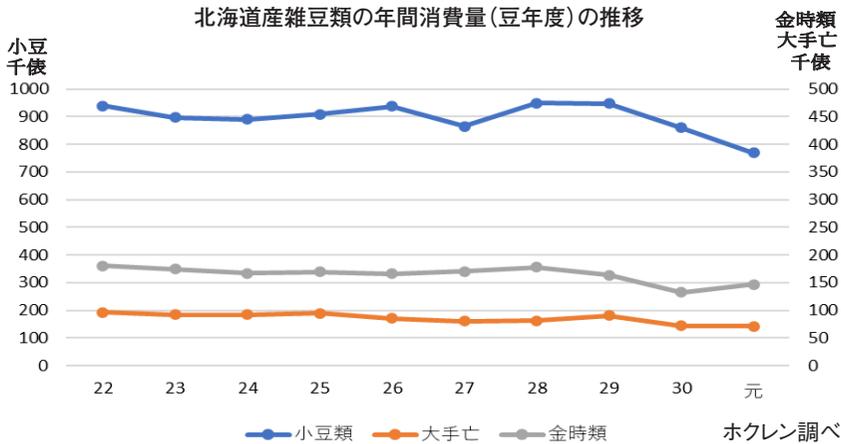
最近25年の主な雑豆登録品種(北海道)

区分	品種名	登録年	栽培適地	主要特性
小豆	しゅまり	平成12年	早生種地帯を除く地帯	中生、落葉病・莖疫病・萎凋病抵抗性、加工適性優、耐冷性：弱
	きたろまん	平成17年	道東・道央・道北の早生種地帯及び早・中生種地帯	やや早生、落葉病・莖疫病・萎凋病抵抗性、耐冷性：やや強、開花前の低温により短茎化する場合がある
	きたあすか	平成22年	道央・道北・道南の早・中生種地帯、中生種地帯、中・晩生種地帯	やや晩生、落葉病・莖疫病・萎凋病抵抗性、多収、大粒、耐冷性：やや弱
	ちはやひめ	平成28年	道東・道央・道北の早生種地帯及び早・中生種地帯	早生、落葉病・莖疫病・萎凋病抵抗性、耐倒伏性優
	エリモ167	平成29年	早生種地帯を除く地帯	中生、落葉病・萎凋病抵抗性、安定多収、良質
	金時類	福良金時	平成14年	全道
福寿金時		平成22年	全道	早生、大粒、多収、黄化病抵抗性：極強
かちどき		平成29年	十勝、網走、上川	中生、大粒、多収
きたロツソ		平成29年	十勝、網走、上川	早生、洋風料理向け(粒大・粒色)
秋晴れ		令和元年	全道	早生、多収、耐倒伏性、黄化病抵抗性：強
手亡類	絹てぼう	平成16年	道東の特に冷涼な地帯を除く全道	中生、叢性、炭そ病抵抗性、大粒、加工適性良

4. 雑豆の消費の推移

(1) 北海道産雑豆類の年間消費量の推移

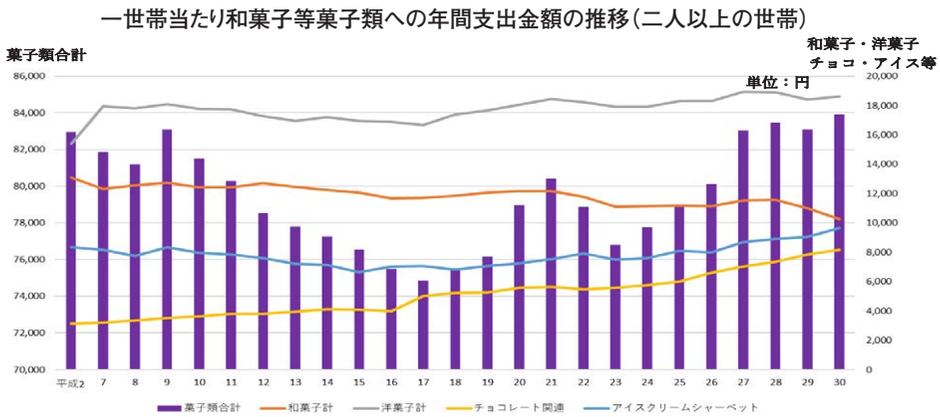
北海道の小豆の年間消費量を最近10年間の推移でみると、ほぼ900千～950千俵の間で推移し続けたものの、平成30年(豆年度)に860千俵、令和元年(豆年度)に770千俵と、大きく落ち込んだことがわかります。



(2) 雑豆加工品の消費量の推移

小豆やいんげんの消費の大宗を占める和菓子の最近25年の消費量の推移を一世帯当たりの年間所得からみてみますと、長期的に緩やかな減少傾向を示した後、平成29年及び30年には明らかに減少しました。

一方、洋菓子は長期的に微増傾向を示しています。



総務省家計調査年報